

1.

「毒にもならないじゃない」

柵を纏った心臓の隙間から、ようやく搾り出すように、射命丸文は呟いた。雁字搦めの現状に少しでも歪みを与えられるようにと、内外に向かう怒りの中で、彼女は願った。

□

喝采が上がる。

その騒がしきは、会場の隅っこに泰然と佇む文の元にも減衰なく届いた。二日酔いでもないのに、天狗らが集いて起こる騒音は彼女の頭に直接揺さぶりを与える。杭打ち機を脳天に充てるような断続的な衝動ではなく、脳内回路を遠慮ない侵入者に歩き回られるような、そんな不快感だった。

妖怪の山の広場、特設された雛壇を囲むように渦巻く新聞記者たち。広大な自然と土地を持つ妖怪の山では、この密度は稀有に分類される。壇上は、幻想の世

界にはそぐわない人為的な飾り付けが為されている。その小さな空白の中に、賞賛を受ける一人分の役割が上がり、呼応するように拍手が起こる。手渡しと定型句の儀式を終え、無数の手が鳴らす万雷の音に追われるように壇上から吐き出される。また一人、空白に上がり、類型の賞賛を集める。その繰り返しを、先程からずっと続けていた。

年に一度の、幻想ブン屋たちの式典。ネタを追って東奔西走し続けたブン屋たちに、労いと一区切りを与えるべきタイミングで開催される、新聞コンテスト。その年の出来事を明敏に切り取った記事、読者のみならず他の新聞記者たちにも影響力を与えた記事、その執筆者に褒賞を与えるために催される式典が、この日執り行われていた。

文が記者を志す以前から連綿と続いてきたこの大会は、「互いに精進し互いに真実を捉える慧眼を磨く」という理念を持つ。雛壇に架かる横断幕にも描かれる絵記号——双眸と羽筆の交わったようなロゴ——は、理念を具現化した重要なアイコンであり、大会の創始者によって理念の不变を願い作られたという。

大会は、創始者の思惑通りに幼き頃の文に目標を与えていた。あの大会で賞賛されるような記事が書きたい、と。ただ、文の熱意は大会理念が設定した目標地点を中継地点とも捉えずに越境し、創始者の思惑を超えて大会に行き過ぎた意味を彼女に与えた。曰く、「ブン屋として大会に出席するのは自分が受賞する時までおあずけするから」と。今でこそ数寄者のレットルを貼られる文だが、根源にあるのは——あったのは、捏造とは無縁の羨望だった。

そう、意固地に心に決めた彼女が、この場所に来ている。

それは文の受賞と同値で置き換え可能な事実であり、筆を握った日から何百年もたった今でも悲願に位置づけられたままのはずであった。

ただ、悲願を達成したはずの今の文が流すのは、憂鬱と毒。

——これが、新聞コンテストなのか。

文は口を固く結んだまま、腕を組み、腰までの低い扉にお尻を乗せ、ゆっくりと長い呼吸をした。呼吸を

感情に侵食され、灰色の霧のようなため息を吐いてしまえば、危ういばかりのバランスが崩壊してしまう……そんな予感を、文は努めた冷静の最中で拾い上げていた。

望まない受賞。通達から当日まで、何度も辞退に意思の針が振れた。何の後ろぐされもなく同心の喝采を浴びることができたら、迷うことは何もない。手放しの賞賛を嫌うほど、偏屈は過ぎていない。

だが、本日文が呼ばれたのは——。

「あら。文じゃない、何孤独ってんのよ」
広場中央の人だかりを睨め続けていた文の意識の外から、声がかかった。不測に対する風神の速度で、文は振り返る。

視線を留め、視界を整えると、両手に催事の格式を飾るようなご馳走の皿を載せて怯えてみせる天狗、姫海棠はたての姿があった。

出会い頭に人の顔を見て恐怖を覚えるのは何事かと文は思ったが、すぐに自身の眉間の皺に思い当たった。不用意に漏らしてしまった警戒心を、文は収める。行き場を失った矛先と照れ隠しの共存した仕草で、肩を

竦めてみせる。その姿を得て、はたてはようやく引きつった顔の口元を上げて、平静を戻して話し始めた。

「こんな目出度い席なのに端っこで憂鬱垂れ流して、ゴキブリと縄張り争いでもしているのかしら」

「そういうあなたはフオーマルな場に窒息死しそうになって、こんな端っこまで逃げ果せてきた訳ですか。ご苦労なことです」

それは壇上の空白で行われている儀式と何ら変わらない冗句だった。意図が色褪せて形骸化した定式に縋らないと互いに賛美することもできない天狗らと同じように、文とはたての間では出会い頭に毒舌を交わし合う形式を経ないとやり取りが行えなくなっていた。口撃による二拍から、二人の通常が始まるのだ。

けれど、この日に流れる通常などないことは、理解していた。

覚悟を持ってこの場に足を運んだ文にとっても、文を中心に渦巻く顛末を全ては知らずともどのような意志が働いたかを嗅ぎつけてきたはたてにとっても、同様だった。

はたての落ち込む姿、自嘲的な落胆は、正対する人の方が精神に深手を負うのだ。

だから、当然のごとく隣に寄って座るはたてを、文は追い払うことはできなかった。忌み言の一つ二つを垂れ流すように吐くが、歯車一つ失った機械仕掛けの怠らばつちのように空転するだけだった。頭痛は進行していない。けれど、横隔膜あたりを、渦を巻いて流動する名前のない心地悪さが新たに文を悩ませ始める。

北寄りの風が、少し強くなってきた。

二人は風からも逃れるように、広場の囲いに背中を寄せる。

足を投げ出して伸ばしきる文と、膝を抱えこむように座るはたて。隣り合った二人はとも非対称的で、共通していることといえば天狗記者のコミュニケーションからはみ出してしまったはぐれ者、という点ぐらいのほずだった。その些事が、二人がいるこの場、新聞大会の式典において、細く強い線となって、繋がりを生んでいるように見えた。勿論文ははたてとの繋がりがその

□

難壇で行われていた、吐いて捨てる大きな呼吸は一段落を得て、式はご歓談の時間を迎えているようだ。文の脳内を歩き回る不快感が、僅かに足音を潜めはじめている。

二人はというと、文が先から居座り続けた端っこをなおも守り続けていた。腰掛けの高さにある扉から地べたへと着座をずらして、少しでも喧騒を遠くに追いやろうとしているように見える。

晴れ舞台の中で陰気を立ち昇らせる文の領域に好き好んで土足で入り込む奴はいない。それが現状ではあるが、脅かす存在が実際にいるに因らなず、これ以上不安定を与える外因を増やしたくない、そんな文の意志が姿形に現れていた。

そんな個人領域に、はたては入り込む。

単なる無神経ならば、相応の武力行使であしらって終いだ。だが、閉室育ちで培った、「相談に乗れば全ての悩みは解決する」と信じて疑われないお嬢さんの妄想を打ち砕くことは、文にはできなかった。何より、

ものを認めないだらうし、はたてはそんな些事で繋がっていることを認めないだらう。

しばらく、料理を頼張る音だけが続いた。食事風景を押し付けるためだけに来たのだと勘違いさせるには十分なほどに、はたては多くを食べてみせた。最初に文のもとに持ち込んだ二つの取り皿は、ほとんど彼女が完食してしまい、今は追加のデザート皿を丸々横奪してきて出張の甘味処を開き、自給自足で堪能しているところだった。

「ああ、もう幸せ。こんなご馳走をいつでも味わえるなら、もっと早くパーティに出てくればよかったー」

「ヒキコモリだものね」

「だから、ヒキコモリじゃないって。ブン屋として生きるための私のスタンス。念写を生かし、無駄足を削いだ、私だけの書き方なんだから」

「そうね」

「そうやっていっつも私を異端扱いするけどね。だいたいねえ、カメラも文書作成機も印刷技術も進化の一端を辿る中で、突撃を冠付けた取材方式で真実を切り取るというのが前時代的で、しょうもないことだと